たんとキッズあおき通信

Vol.26

写真：軽井沢町　雲場池

コラム　～　秋といえば・・・研修シーズンです　～

この業界では、秋は比較的緩やかな季節になっているため、多くの研修が開催される時期です。
普段、私は多くの研修などを担当させていただくことがあり、どちらかというと話す立場になることが多いのですが、実に８年ぶりに受講者として研修を受けてきました。
今回は、相談支援専門員という障がい福祉の中で言うと高齢者福祉のケアマネージャーのような立場の資格研修で、今回は「現任研修」と言って免許更新のような資格研修です。
この研修は、約３ヶ月の期間をかけて行われる研修で、研修を受けたあとインターバル研修と言って、地域の現状を調査し地域の仕組みを改めて知るための現地研修などを行いレポート提出することで資格更新ができるものです。
相談支援専門員というのは、高齢者のケアマネージャー（ケアマネ）のような立場と先ほどお伝えしましたが、少しだけ高齢者のケアマネとは違う動きが求められます。
特に、今回の研修の中では「地域とのつながり」を強く求められました。地域資源、地域での生活を大切にすること。
高齢、乳児、障がいを持たれた方々には、今後、個別避難計画というものを作成していくことが決まっており、その中でも地域との関わりや、地域の民生員などの役割を持った方々との情報連携などが今後のテーマになっていくことを学んできました。
そして、次の週は今度は研修を実施する側ではありますが、支援サービスの責任者向けの研修があり、今回は専門コース別研修という分野に特化した研修で、「障がい児研修」がありました。
ここでは、こども家庭庁の専門官をお招きして最新の支援に関する情報や今後の展開などについての講義、午後は長野県内の障がい児支援に関わるみなさんなので、事例を元に自分の地域を考えるグループワークでしたが、今回、飯山町の事業所と児童館の取り組み、そして私から青木村と上小地域の取り組みを実践報告しました。
まだまだ課題はありますが、昨年はこども家庭庁の専門官に青木村の取り組みを事業所の視察とともに見ていただきましたので、今回はその後の話でしたが、とてもいい評価をいただいてきました。これからも、精進していかねばいけないなと勉強してきました。

裏面も読んでいただき、何かお子さんに不安や心配事などがありましたら、村の保健師や教育委員会、
たんとキッズあおきまで、ご相談いただければ対応いたします。

たんとキッズあおき（ＮＰＯ法人たんと。）

TEL 0268-75-6789

青木村田沢3075－1

■開所時間　9:00-17:00
■定休日　　土日祝日

NPO法人たんと

あなたの知らない発達障がいの世界

2025.11

強度行動障がいって聞いたことありますか？

みなさんは「強度行動障がい」という言葉を聞いたことがありますか？先日、大阪のテレビ番組の特集で取り上げられたのは、諏訪地域で暮らしていたお子さんが行く場所がなく、最終的に大阪のグループホームで暮らす事ができたという番組でした。MBS ドキュメンタリー「映像」という毎日放送の番組で、TVer で見ることができます。もし気になる方がいらっしゃいましたら一度ご覧になってみてください。この記事を書いている時点ではもうしばらくは公開されているようです。
私は、もともとこのいわゆる強度行動障がいという状態の方々を支援する事を、長らく行ってきました。
今でも、たんとの本部（佐久市）では、このような状態の方々でお子さんから成人の方まで支援をしています。
この強度行動障がいという状態（これは、障がい名ではなく状態のことを表す言葉として使われています）になってしまうかというと、多くの対象者は　重度の知的障がいと自閉スペクトラム症の方で、私達が日常、当たり前のように使っている「言葉（会話）」でのやり取りに苦手なことで、自分自身が感じている事や思っている事が上手に伝わらないために、イライラが募ってしまい結果的に、周りが困ってしまう事を繰り替える状態が常に続くことで、それが当たり前になってしまうためです。
「え？なんで？」と思う方も少なくないかもしれません。中には、暴れたりすること自体がこの強度行動障がいという「障がい」なんだと思われた方もいるかもしれません。
しかし、この状態は作られた状態なのだということを私達は認識しながら付き合っていいかなければなりません。この勘違いが、多くの行動障がいの方々を苦しめている原因の一つでもあります。
とはいえ、周りから見たら人を傷つけることもあれば、自分を傷つける、物を壊すなど行動が派手な分、印象が悪いのは否めません。今現在、そのような方で行動がどうしても落ち着かない方はどうしているか知っていますか？成人のおよそ半分の方が　施設入所をしています。また、その４分の１程度の方は精神科の病院で入院をしています。その方たちが再び自宅で家族と生活できるか？と聞かれると、多くの確率で現在は難しいと答えるしかありません。しかし、何もせずにただ看ているわけではなく、ここ数年で劇的にこの日本国内においても、彼らの環境は変化をし始めています。
今現在、日本全国では障がい者の入所施設の入居者の高齢化が深刻な問題となっています。多くの施設では平均年齢が５０歳を超え最高齢が８０歳を超えているところも少なくありません。
すでに入所してから有に６０年以上という方もいらっしゃいます。人生の大半を入所施設で生活しているということになります。日本には障がい者とは別の分野で高齢者福祉があり、そこでも入所施設は存在していますが、障がい者入所施設から高齢者入所施設に移ることはとても難しく、ほとんど実現していません。
結果的に、障がい者施設でも高齢者支援が当たり前になってきており、若い元気だけど地域で暮らしてくためには課題がたくさんある方が暮らす場所も、実はほとんどないので先程お伝えしたような状況は大きく変わらないものの、自宅で生活している方も現在は多く存在している結果になっています。
そのため、冒頭でお伝えしたような地元では暮らす場所がなく、遠く大阪まで住む場所を探して、暮らしている人もいるのです。
とはいえ、生まれたときから一緒に暮らすことが難しいという理由ではなく、日々、本人の気持ちが伝わらない、こちらの気持ちが伝わらない、お互いが理解する事が難しい状況が続いたために二次的に発生してしまった状態がこの強度行動障がいだとすると、お互いが理解するための方法があれば収まってくるのではないか？と思いませんか？
私達も、海外の方と一緒にクラス時「言葉」がお互いを理解するための大きな壁の一つになります。
とはいえ、この例え話は海外の方であり、さらに言えば他人とのやり取りです。しかし、重度の知的障がいがあり、自閉スペクトラム症を併発している方は、たとえ同じ日本人であり、さらに家族であっても同じ様に言葉や理解、文化（活動）の壁が存在しているのです。家族にしてみればそれはとてもつらい事だと思います。
特に親にしてみれば、我が子とまともに会話する事すら叶わず、毎日、悩みながらでも色々考える前に子どもが危険な目に合わないように守りながら、苦しい時間を過ごします。
そして、たとえ１８歳を過ぎてもなお、子どもが独り立ちすることも難しく終わりのない子どもとの時間を過ごすことになります。そんな中、今は少しでも気持ちに寄り添う手段や支援方法が広まりつつあり、まだ少ないですが、支援するための仕組みや理解し適切な関わりができるように研修などが開催されています。
私達、NPO 法人たんとはもともと、行動に課題のある方々の支援からスタートして、佐久本部では現在も中心は強度行動障がいで自宅で生活しているもしくは地域で生活している方々への支援を行っています。
ただ、最初から行動に課題があった訳ではありません。
気付いた時に、その子の将来を考え、何が必要なのか？何を目標に成長を見守っていくのかを考え、強度行動障がいと呼ばれる二次障がいにならないように、支援を受けていきながら一緒に成長していく事が、とても大切であり、それを理解し支えてくれる　**地域**　が絶対に必要な要素です。